

婦人子



第七卷

第十一號

香

第七卷第十一號目次

小學校より見たる幼稚園	通藤未吉
家庭に於ける諸儀式	後閑菊野
婦人の娯樂及教育に就て	江原素六
幼稚園の教育	中村五六
英國の家庭及婦人に就て	宮川すみ子
野猪と組討ち狙討ち	川口孫次郎
色の話	藤五代策
割烹	石川泰次郎
俳句	鹽野奇零
短歌	眞宮起雲
三つの答	硯山人
董御殿	とよ子

投稿募集

一種類 ●お伽話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分
 選擇の上本誌に載録せるものは
 内規により原稿料を呈す

一般記事

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取
 らずして其指定する人に本會より直接送ることを得

一注意 お伽話及一般は記事一行廿二字詰にて半紙又は罌紙に書
 かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎
 月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回は何時迄も引續いて
 行く積習です。

宛名は本會へ直接御送り下さい。
 開き封で應募原稿と標記すれば三十匁迄は郵税二錢で参ります。

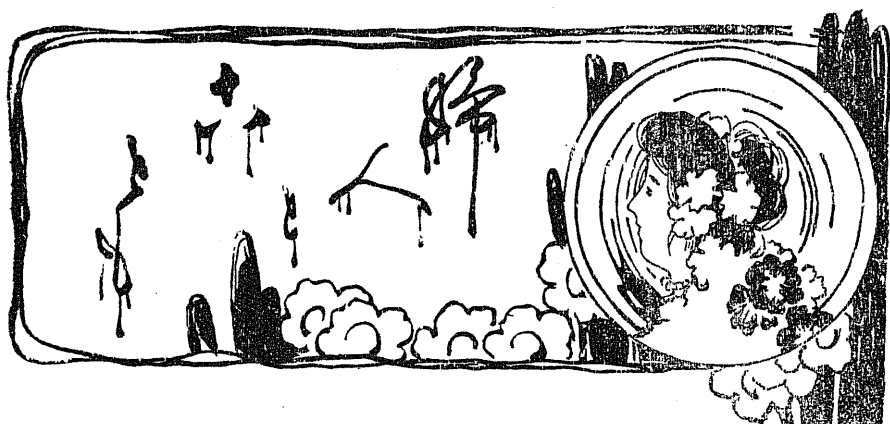
質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する
 事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速
 に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年
 分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登錄して雜誌を發送致
 します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會
 か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい。

- 一冊郵税共金拾一錢
- 六冊前金郵税共六拾錢
- 拾二冊同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増



第七卷第十號

香

富豪の家の子女所謂かんば、日傘に育つと云ふ。然も第一等の育児法に因りて教育せらるゝにあらざるが故に、其成る所のものは放恣柔弱滔々として皆是のみ。従來我國の風習として乳母と子守とを備ふるを以て育児上の最上要件としたるが如し。然も彼等の幼児教育其物に對するや全然素人たるを免れず、其多くは普通學の素養だになく況んや専門家としての育児上の智識の如きは寸毫も之なきなり。此の如き乳母や子守を雇ふことを知りて専門の幼児教育者を雇ふを思はざるは不審かしき限りなりと云ふ可し。將來其子女をして第一流の完全なる教育を受けしめんとせば宜しく先づ第一等の幼児教育者を雇聘して先づ其始めを完くす可きなり。始め完からずして終の美ならんことを希ふは座して黄河の澄まんことを望むに等しかる可く。幼児時代に完全なる教育を施さずして小學校中學校の教育の完全ならんことを希ふは無理なる注文と云ふ可し。(湘南)

小學校より見たる幼稚園

加藤末吉

毎年四月就學の期に來り迎ふる處の兒童の三分の二は幼稚園保育をうけたるものであるから是非之を取扱ふにつきては幼稚園保育の狀況をくはしく見その間の連絡を保ちたいものであると思ふて居りまするまだその機會がないので甚だ残念に存じます。就ては小學校より見たる幼稚園をかれこれ申しますのも如何はしき次第、とかくは小學校に重きを置く傾きなきにしもあらずすかその邊は御容赦を願ひます。

まず幼稚園より來らざる者をさして普通の幼兒といひ此普通兒に比して幼稚園出身者は入學當初は如何狀態なりやといはゞ

曰はくたしかに優良なり然れども時日を経るに從て同一様になる事もたしかなり。これは毎年の結果然る事をたしかめられたり

當初吾人が管理上につきて比較的感は如何

教師を困らすものは幼稚園より來れるものなり。

とこれ若し全部が幼稚園より來れるものならんには此弊は認めざるへし。たゞ三分の一の普通幼兒に對し三分二の幼稚園出身者の勢力のまさされる教育的に明かなる處なるが、後者は已に知れる事項を前者の爲めに犠牲になり取扱はるゝがためにつまり普通幼兒と水平の地位にあらしめんがために心竟に餘裕を與へられ惡戯を工夫し出すの時を與へらるゝ結果教師の命に従はぬに至れるなるべし。されど兎に角教師をして管理上に方を用ひしむるものは幼稚園より來れるものなり

小學校時代を卒へ中學にすゝむ時に於て兩者の結果如何。

これたれ人も知らんと欲せらるゝ處なるべし

百人ニツキ	美	良	可
幼稚園出身者	二人四分	四人	四人七分
普通のもの	二人二分	三人二分	三人九分

右により見れば概して幼稚園より來れるものは成績佳良なりといふをばいからざるべし。

本年來れるものも運動を好み快活にボール投げは巧みにそのなす處としてよく遊ぶも比較的欠席する事容易にして度數多し。これにより考ふるに幼稚園あるによつて兒童の健康を今日の如くなされるものにして若しこれなくば此欠席者より多くして吾々の困難も倍せしものなりしならんと思はれ、其保姆關係者の辛苦の程も推察せらるゝ次第なり。

今其優劣の點を列擧するに

- (イ) 優れる點
- (1) 言語明瞭なり然れども團躰の下品の詞交れり
- (2) 万事万端によく氣がつく兒なりされども早熟の風なきにあらざ
- (3) 羞かむ事なしこれがため小學校に來りても直に教授をうけ得らるゝ態度となれり
- (4) 唱歌の耳を持てりされば唱歌を習ふて容易なり

(ロ) わしき點

- (1) 兎角物知り顔にて不注意にきゝながす風あり
- (2) 何かせずには居られぬ風にていたづらをなす之れ活動力溢るゝが故なるべきも正當の訓練により守るべきに守らしめ數分間の注意の集注を習情たらしめば此風を去り得べき乎
- (3) 名譽心つよく級長などになす事あれば得々然たるその心中には名譽のよろこびと共に傲慢心はさざゝれたるを見うける
- (4) 命令を二度くりかへさしめたくりかへさしむる處のものは幼稚園の幼兒なり服従は第一の教育なり然るによれば教育をうくる心的状態には程遠くなれり
- (5) 話を横道に入るゝはまた此の兒童なり例へば日曜日に動物園にゆきしが猿が居ましたと話せば熊も居ました何も居ました何時か淺草でも見ました淺草には何ゝがりましたとの如きなり
- (6) 靴のひものとくるは幼稚園よりのものに多し

(7) 歌の時目の散ずるは幼稚園の出身者なりこれ

注意散漫するが故なり

取りわけて見れば以上の如し。さらば全然教師の扱ひにくき兒童は幼稚園出身者なるかの觀あらんも然るにわらず。家庭より來れるもの、中には天真爛漫なるものあれども、また祖母その他年長者によりて育てられ爲めに六づかしき漢宇を知りまた教を多く覺え居り高慢となれるものもあり、また家庭に於て母を專有するか如く教師を專有せんとする風ありて、扱ひに困しむ点は同様にして差別ある事なし。

概して幼稚園に於ては教へすぎる。早熟にならしむる風あり、女々しき点ありといはん。

家庭は己れの手をすこしにても知者になさん利巧者ならしめんと欲して幼稚園に向つても注文する處多かるべし、これに對してすこし教へすぎること

わらずや。

幼兒はいまだ野蠻的利己的のものなり公德を重ん

じ道義を辨へしむるには程遠き年齢、然るに是非良徳禮儀を守らしめ行はしめんとする、強ふるにわらずは何ならん、教ふるに過ぐる一点なるべし。

然らば小學校に於ては如何にして取扱ふや常々幼兒の發達に省み幼兒の最も信頼せる本尊即恐怖の時も悲しき時もうれしき時もわからぬ事も父母によりてなぐさめられ教へられつゝ來れる者なれば家庭にわりては父母學校に於ては教師其本尊となり、すべてこれに模倣せしむるの方針とれり。

教師が高くとりて正しき行、正しき語にて接し、腰をかくるにも先生のやうに、御禮儀をするにもまづ先生のやうにこれ位になさしむる事をつとむ、家庭のよき處否上流の家扶家令によりて育らしものは常々あまりに説明を加へてあつかはれ、祖母育ちのものも常に大人らしく説明を加へて、前者は若様左様遊ばすと御爲めがよろしうござり

ませんからおよし遊ばせといひ一々道理を以てと
 き、老人はかゝる事を以ては斯くなる故にして
 はならぬとくどくといひきかされて育つが故に
 小供らしき處を失へり。小供は小供らしきがよし、
 大人と見まかふやうにしてはならぬ、そこで小供
 をわつかふに小供の模倣想像力の強き處をつかひ
 て、常に教師はその模範として一舉一動をゆるが
 せにせず、教授するに於ても徒らに教科書に抗泥
 せず、同様に教師を中心として教師の身邊の出来
 事、家庭談をなしてその間に於ける禮儀によりて
 兒童にもわれも然かなさんとの模倣の念に訴へて
 躰けをなし、推究心に訴へし思考を養ふの方法を
 とり初年級を取扱へり。

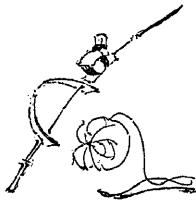
斯様の取扱ひをなすに就ても教授をうけつゝある
 ものは注意する事必要なり、教授の行はるゝは注
 意の有無によりてなるものなり、されば幼児が人
 の話せる間注意し得るの習慣を幼稚園時代につけ
 られなば幸ならん、これを養ふためには注意集注

の時間を長くせつしてその注意すべき事項につ
 ては充分傾注するやうに話するにも力に強弱をつ
 けてなさん事を要す。

また共同の團體中に於ける禮儀を躰けおかれん事
 を欲す例へば出席簿記入の間自分がすめばやかま
 しくするが如き事なからんやう注意しつゝ、此禮を
 知らしむるが如きなり。

又常に同時に多くを要求せずして一時一事とする
 やうにありたし然らざればたい口やかましくさゝ
 ながさるゝのみなればなり

種々遠慮なく述べたるが事の適否は御考の中に取
 捨せられん事を乞ふ



家庭に於ける諸儀式(承前)

後閑菊野

其三 成年祝

これは男子が成年に達したのを祝ふ式でございます。成人とは満二十年に達したとき即ち徴兵適齢を指していふのでございます。昔は男子には元服の祝といひ女子には鬢そぎの祝と申しまして何れも成人を表す意で行つた式でございます。

元服を行ふ年齢は身分と場合とによつて一定しては居りませんが大概十歳以上二十歳までに於て行はれたものでございます。稀には五六歳で行つたものもございしました。元服を行ふまでは童子として扱はれ其の名なども何若千代など稱へ元服の後始めて實名を名乗ることになつて居りました。即ち源義經の幼名は牛若で徳川家光の幼名が竹千代であつたやうな類であります。官位は元服を行つた後でなくては拜命することが出来ませぬから高貴

の人は種々の都合上早く此の式を行ふのもまゝ、わつたのでございます。

六

元服の時には加冠の役理髪の役といふことがございまして加冠とは烏帽子をとつてかぶせる人即ち烏帽子親の事をいひ髪先の紙に包んで之を切る人を理髪といふのでございます。そこで理髪の人が髪を切りますと次に加冠の人が烏帽子をとつてかぶせるのでございます。此の時加冠の人から名乗宇を一つ遣はすことなどもございます。即ち東照宮御實配に次の如く配されて居ります。

竹千代君家康御年十五にて今川治部大輔義元の許におはしませし御首服を加へ給ふ義元加冠を仕うまつる。關口刑部少輔親永理髪し奉る。義元一字を參らせ治部三郎元信と改め給ふ時に弘治二年正月十五日なり。

さて祝宴の時は加冠の人より冠者に盃を賜はり名乗宇を書いた折紙に太刀又は馬などをそへて贈り物とし冠者よりも加冠の人に盃を進め贈り物を

いたします理髪の人からも盃を賜はり贈り物があ
りまして冠者よりも同様にいたします冠者の父か
らも加冠理髪の人に贈り物をする例がでございま
す

さて現今に於ては元服を行ふ必要なく從て是等
の或は不用でございますけれども成年に達したの
を祝ふのは一は本人をして責任の輕からざるを知
つて自重の心を起させ一は父母が其の子の徴兵適
令にも達して國家の爲に盡し得るに至つたのを歡
ぶ意を表はす所以でありまして至當の事とぞんじ
ます今例によつてその式に關する大體の私考を述
ませう。

當日本人は朝早く起きて手洗ひ口漱ぎ髪を梳り
新調の衣服を着し先づ神前を拜し次に祖先の靈を
拜するがよろしうございます此の時父母は定めか
いた座敷の上席に着座いたします本人は下座から
はいり父母に向つて座します此の時本人の弟妹又
は然るべき召使がの者が鬘斗三方を持ち出でまし

て父母と本人との中央にかきますのを待つて相方
互に會釋をいたします此の時父母より將來の心得
方を教訓するがよろしうございますそれが終りま
したらば銚子と三つ盃とを持って出で先づ父の前

に置きます父が三度飲んで母にさします母も三度
飲んで子にさします子も亦三度飲みまして此の盃
はこれでをさめますそこで酌人は中座に歸りまし
て次の盃を上にして持ち出でます此の度は先づ子
に進めます子が三度飲んで父にさします父が三度
飲んで母にさします母が三度飲んで之を納めます
酌人はまた中座に歸り下の盃を上にして持ち出で
まして母に進めます母三度飲んで子にさします子
が三度飲んで父に進めます此の時父母から引出物
を賜はります子ば座を避けて之を推し戴き上座に
置きます是れで祝の儀式を終りましたのでそれか
らは家族親戚一同列席いたしました宴會を催した
らよいでございませう當日の座敷飾には成るべく

は忠君、愛國、武勇、立志、正義、廉潔、宏量、忍耐等

の意を偶したる裝飾品を用ゐるが適當でございませう試に一例を擧げて見ませう

床飾 右床巾一間

掛物 源義家名古曾の關に櫻花を賞する圖

花 竹に白椿紫檀の臺に載す

買物 龍、波間に珠を弄ぶ形

棚飾 遠棚巾一間

上の棚 書籍

下の棚 食籠

押板 熨斗三方

附書院 硯箱及び短冊箱

其四 天長節

天長節は 今上天皇の御誕辰を祝し奉る佳節で

ございませすから萬民の共に慶賀し奉るべき日でご

さいませすそれゆゑに職を官廳學校等に奉ずるも

の各定めの時刻には宮中或は其の官省學校な

どに出まして奉祝の意を表するのでございませすが

各家に於ても其の家々の都合によつて時刻を定め

祝式を行ふやうにいたしたらよろしからうとぞん

じます即ち

先づ天照大神の神扉を開き神酒洗米等を供し表座

敷には兩陛下の御寫眞を奉掲して家族一同衣服を

改めて順次に拜禮し寶算の無窮を祝し奉るべきで

ございませす式後は別席に於て宴を開いて奉祝の意

を表するがよいでございませす場合により親戚知

人などを招いて共に祝しましたならば一層よろし

いでございませす祝宴餘興としては音楽などの催

しがよろしうございませすその外詩歌書畫盆畫石

なども亦妙でございませす座敷飾は總て陛下の

御徳を顯し且つ寶算の無窮を祝し奉る意を以て

することが出来ましたならば最もよろしいのでご

さいませす次に二三の例を擧げて見ませす

床飾 第一例

掛物 富士の圖

花 菊

置物 仙人

第二例

掛物 重陽の圖

花 萬年青

置物 籠香壇(銀製或は青磁)

棚飾は勅語を寫したる卷物を軸盆に載せて上の棚に置くなど最も適當でございませう其の他は普通の場合に於ける裝飾品と同じものでも差支はございません

第三例

これは西洋風の室飾として一例を挙げたのでござ

います

客室

紫檀製大棚

幅一間高さ一間違棚もあり通し棚もあり並

に樹子形扉附一箇所引戸附一箇所ありこゝ

に精巧なる美術品を形容色彩に従て適當に

配置するものとす

次に其の品目を掲ぐ

古代唐草高蒔繪手文庫

梨子地櫻の散し模様ある硯箱

堆朱軸盆に卷物一卷を載す

堆青香合丸形のもの

古銅水盤形花器に白菊を挿す

牙彫牧童

有田燒錦手菓子器

古代能の面(翁)に中啓を添ふ

充分裝飾を施せる置時計

盛花

三角棚 下袋戸棚は四段

袋戸の上 繪端書帖

三の棚 瑪瑙鶏雌雄

二の棚 蒔繪二重卷烟草入

一の棚 寫眞立て

花 室の一隅に卓を置き之に花を飾る

古松に菊數種を豊に盛る 花瓶銅器

額がく

油繪あぶらえ、刺繡ししゅう、天鵝絨びらうじ、友禪等ゆうぜんとうの額がく

屏風びょうぶ

金屏風きんべうぶ一雙いさう 極彩色重陽きよくさいしじゆうやうの圖づ

卓たふ

紫檀したんにて達つたり金襴きんらん、純子等じゆんすとうの精巧せいこうなる織物おりもの若もしくは刺繡ししゅうを施ほどこしたる卓掛たふかけを用もちゐる

椅子いす

長椅子ながいす、脇掛椅子ひしかけいす、普通椅子ふつういす

右みぎは何なにれも相當さうたうに裝飾さうじやくあるものにして蒲團ふとんは總すべて精巧せいこうなる織物おりものとす

小卓せうたふ

處々しよしよに配置はいちして茶菓子ちやくわしを進すすむる用もちに供きよす

食堂しよくだう

食卓しよくたふ

大食卓おほたふを中央ちゆうちゆうに置おく白しろ卓掛たふかけを以もつて覆おひ活花いっけ

五個ごこを配置はいちす

暖爐だんろ

英國風えいこくふうのカミーンとし上部じやうぶに裝飾さうじやくを施ほどこす正面せうめん

棚上たなうへに油繪あぶらえの大額おほがくを掲かげ其そのの前まへに時計とけいを置おき

左右さうじゆうに鶴龜つるかめの置物置きものを飾かざる兩端りゆうたんに花瓶けぼん一對いっとう右に

菊花きくわに梅うめもどきを挿さす

置物置きもの

室むろの一隅いちごくに竹たけの大鉢おほはちを置おき又一隅またいちごくに神女しんじよの像ぞうを置おく

額がく

暖爐だんろの左右さうじゆう及び他たの三方さんぱうの壁かべに油繪あぶらえ、日本畫にほんが、彫刻てうこく、刺繡ししゅう、天鵝絨びらうじ等とう大小おほいせう種々しゆしゆの額がくを掲かぐ



婦人の娛樂及び教育

に就て

江原素六

現今の婦人が果して娛樂なるものを有するや否やは頗る疑はしい問題である。又婦人の娛樂にして、社交上の必要より求むるものならば格別弊害があるまいと思ふけれども、之に反して一人が一時の快樂を目的とするものに至りては、無益若くは有害なものが往々見えるやうだ。例へば芝居見物とか、花骨牌とか云ふ如き種類のものは、婦人の娛樂として果して効力あるや否やは不明である。眞に興味を有する所の娛樂は、婦人の性情の上には非常なる慰藉感化を與へて、其活動發展を齎する効驗多きに止まらず、道德の修養上にも深大なる感化を與ふるものである。單に美衣を纏はんことを望み、滋味を食せんことを求め、自己一時の感情を満足せしむるだけの事ならば、其娛樂が果し

て婦人の性情を向上發展せしめ得べきや否やは疑問で、時としては却つて奢侈遊情に陥らしむる弊を生ぜぬとも限らぬと思ふ。演劇等を見物に行くため、徒に着飾りに苦心するといふ様な事では、娛樂を求めて終に娛樂の趣旨に反する事となるでわらう。娛樂にして眞誠なる興味を有する娛樂ならば、之が人の性情の上は偉大且つ善良なる感化慰安を與へて、その精神常に懇々として、或は僕婢に對するにも、或は世人に對するにも、其他總ての事物に對するにも、常に愛と美とを備ふることが出来るものだ。彼の芝居見物に行くために、準備の仕方が悪いか何とか云つて僕婢を叱責するが如き人物は、娛樂の何たるを解するものではない。

讀者諸子の如きは、夙に知つて居らるゝ所ならんが、彼の有名なる碩學員原益軒は非常に牡丹を愛して居つた人である。然るに或日塾生が角觥を取つて居る間に、誤つて先生の尤も大切にして居る

牡丹の枝を折つた。是に於いて塾生等は、大に懼れ
 いかにして罪を先生に謝すべきか、殆ど策の施す
 べき所を知らなかつた。で熟議の末、遂に隣人に
 頼んで先生へ詫ぶる事に決し、不取敢事の由を隣
 人に話して頼んだ、隣人も之は容易に肯うてくれ
 なかつたけれど、再三懇請の上、漸くの事で承
 諾を得た。依て其隣人は旨を齎らして先生を訪ひ
 事の次第を備に語りつゝ、塾生に代りて謝罪したる
 に、意外にも益軒先生は温容些も平生に異ならず
 莞爾として隣人に向ひ、牡丹は楽しむ爲に愛する
 ので、惱る爲に培ふものに非ざれば、過失に依り
 枝を折りたりとて、毫も配慮するに及ばぬと言は
 れたさうだ。此事は誠に娛樂に關する絶好の教訓
 ではあるまいか。世間には態々朋友杯を招きて饗
 應し、相樂まんとする時分に、無遠慮にも家族に
 對し小言を云つたり怒つたりする人が往々あるが
 此等は折角の娛樂をくだらぬ事のために犠牲とす
 る所爲なれば、心ある人は深く戒慎を加ふべきで

ある。

今日女學校に於いて育児法とか、家政學とか、其
 他種々なる學藝をいかに多量教ふるとも、若し其
 女子にして愛と美との徳が平均に具備し居らざる
 ときは、此等の女子を以て組織する家庭は自然乾
 燥冷薄ならざるを得ないであらう。現に予が知れ
 る一婦人の如きは、相當の學識を備へ、頗る實際
 に巧なるのみならず、娛樂は女子の嗜みなりとて
 なかくの理想家である。牛乳の如きは、嬰兒に
 は幾何の牛乳に幾何の湯を加へ、幾時間煮沸した
 る後何程與ふるが適度なりと云ふが如き事も能く
 研究して、下婢の如きも成るべく物の解かる女子
 を擇び、兒女の保育は殆どその下婢の手に託し、
 其他家政上の事も多くは下婢任せに打捨て、置い
 て、自分は實際上の關係より常に外出することが
 多い、其結果、育兒上の注意足らざる爲にや、世
 間の小兒は大抵夜泣するのが常であるが其家の小
 兒は晝泣をして困る、依て終に醫師の診察を求む

るに、至たさうだ。醫師の注意は言ふまでもなく
 學術上遺憾なきまでに行届いて居るであらう
 が、併し予はその母親が一週間外出せしめて、
 親しく自身に乳を授け自ら種種の世話をして遣ッ
 たならば、醫師の治療を煩はさずとも、其兒の晝
 泣は直に止まるであらうと思ふたが、遂にしばら
 く他出を見合せたところ果して速かに直つて仕舞
 つた。

子女を愛育するは親としての本務であるが、若し
 眞に其子を愛するならば、社交上の種々の關係な
 どは、家事繁忙なりとて謝絶しても決して支障あ
 るまい。何となれば女子殊に主婦としての職務は
 子女の養育保護が何よりも重要であつて実際の如
 きは寧ろ第二位に置くべきものであるからだ。然
 るに世間の婦人中には、不料簡にも往々子女の保
 育をば第二位に置きつゝ、交際の爲とか娯樂の爲
 とか云つてつさらぬ事に時間を費す人が多いやう
 だ。頃者ある新聞で、女子教育に就て論じて居ッ

たが、予は之を讀みて一種の感想に打たるゝを禁
 じ得なかつた。予が少年の時、母の御伽噺に聞
 きし所に依ると或人が極樂へ行つた所が、蓮の葉
 の上に耳と口とばかり澤山有つたゆゑ、不思議に
 思つて何故かと問うて見ると、夫れは耳と口とが
 前世に於て善事をさし、善事を云つた爲、耳と口だ
 け極樂へ來て居るが、靈魂と他の肢體とは惡事を
 働かしゆゑ、地獄へ行つたとの事であつたさう
 だ。此寓話と丁度同じ様に、現今の女子は、口と
 耳とが著しく發達して文明的であるけれども、他
 の行爲に至りては之と相伴はない。理想だけは高
 尙にして間然すべき所なく家政學とか、衛生法と
 かねく種々の學藝に通じて居るが、併し鬚つてそ
 の家庭の實況いかに顧れば、朝寢もすれば、間
 食もするし趣味乏しき上に和樂を缺き、その不規
 律なることに實に言語に絶するばかりである。さる
 にても一度口を開けば尙は良妻賢母を稱へつゝ、
 議論の巧なることは敬服に堪へぬ程だ。方今の女

子は何故に四肢五管が齊一に働き得ぬであらうか
 はれ世の女子教育家たる者の大に精査と奮勵とを
 加ふべき所である。

我國の女子教育は年一年に進歩して、十年前と今日との状態を比較するときは、其間に大懸隔あることは言を俟たないが、併し予が世の女子教育家に對して望む所は、現今の女學生が將來人に嫁し家庭生活を營む場合に臨んで、尙一層質朴に眞面目に業務を執ることの出来るやうな人物に教育して、口と耳とのみが極樂に行けるやうな教育は避け、身體も精神も共に極樂に行けるやうな完全なる教育を施されたい事である。又耳と口との理想に實行が伴はざるが如く今日の女學生は如何にも意志が薄弱である。是れ亦種々の弊害の生ずる源に相違ない、一部の教育家は、一時西洋の所謂スウキート、ホームなる語を標榜しつゝ、儒教の貞節などは大に排斥し、千人に一人、萬人に一人もなきものを模範として教へたりとて、何の效益な

しとし、女子の學業はスウキート、ホームを構成するを以て要訣と爲すべしと謂ひて、恰も蜜の如き甘き話のみを授けて教育したれば、此種の教育を享けたる女子は、少しも自己の志せる目的が齟齬するとか、又は夫が他の婦人にでも關係するときは、堅忍勤苦以て夫の心を改悛せしむる事に力を盡さんとせず、又其改悛するをも俟たずに、往々妻の方より離縁を申し込むことあり、甚だしきは煩悶の未自殺するものなどもあるのだ。

又夫婦間の交情の如きも頗る研究すべきものである。今日の學生等より成立つ所の夫婦は一時は相互に撫でたり舐めたりする様に親しむも、若し一朝些少の波瀾が其間に生ずるときは、相互に忍容交讓して之を回復せんと努むることなく、直に泣いたり死んだりして騒ぎ廻はるのが多い、故に餘り善美を盡したる繪畫の如きスウキート、ホームを理想として女子を教育することは、其利害得失如何は大に審究を要すべきものと思ふ、今日の婦

人の多くは虚飾に逐はれ、空想を貴ぶ、魔慾の爲に煩悶するも、眞誠なる理想を抱きつゝ、或は女子の品性を向上せしむる事とか、或は婦人社會の風俗を矯正する事とか、若くは慈惠救済の事業に盡すとかいふ様なことはまだ甚だ發達して居らぬ例へば遊廓設置問題の如きは、婦人界の問題としても、又政治上の問題としても、なか／＼考慮を加ふべき重大問題である。娼妓なるものは、一般女子と同性の人間たるに拘らず、文明進歩の今日尙純然たる奴隸的境遇に在りて苦んで居る。然れば成るべく之に同情を表して、以て漸次救済の道を講じ、國家の品位を昂むることは、實に上中流社會の婦人の當然盡すべき義務であるのに、彼等は抑も何を考へ何を爲しつゝあるか、此等の重要な社會的事業に對しては何等の興味をも有せず些少の注意をも拂ふことなく、常に點々として之を看過して居るやうだ。是れ實に吾輩が其意を解するに苦しむ所である。

幼稚園の教育

左に記するは日本兒童研究會席上に於て本會主幹中村氏の講話せる大要なり

▲兒童の活動兒童研究を獨り教育家に專任とした時代は疾に過去つて今日では心理學者醫師等の方面よりも各専門に之が研究を試み互に意見を披瀝した處で始めて完全なる兒童研究の基礎が成立つと云ふ次第である、夫れ故幼稚園教育の如きは兒童研究の結果を實地に應用するので昔の如く大人も兒童も同じ様に學術技藝を請込む主義とは全然趣きを異にして居る實地兒童の教育に當つて見ると又其處には種々なる實驗も産れるもので先づ其の一つをお咄しすれば三歳より六歳迄位の幼稚時代の兒童を觀察するに決して瞬間も活動を止めるものでない、爾うして活動するにも同じ遊びは必ず倦意を生ずるものであるから其邊の呼吸は監督者の最も注意を拂ふべき事と思ふ

▲食事の改良 幼稚園の課目と云ふのは唯今の處では遊戯を中心として夫れに音楽、お咄し、手業と云ふやうなものを兒童自然の性理に従つて教へる併し世間には今の幼稚園は教育するためだと云ふもあれば、又幼稚園へ通はせる事は不養成を唱へるものもあるけれど教育するためだと云へば何うしても小學校的になつて來るのは自然の勢だ左れば是等に對し改良を施さなければなるまいと思ふ一例を云へば食事をさせる時の如き小學校ならば宛も角幼稚園に於て机に並んだ徳生徒各自背を向けて食へると云ふ事はない筈で之は矢張り家庭的に卓を圍んで食事する事に一般に改めたので又家庭的にすると云つて何も校舎に整を敷詰すとも宜しからう要するに教師は母親の心になり外形にのみ重きを置くのは却つて宜しくなからうと思ふ云々

英國の家庭及び婦人に 就いて

宮川 壽美子

○家庭と學校との關係

英國では母親たる人も皆相當の教育がありませうゆゑ、子女の教育につきて心を留むること深く、從つて學校と家庭との關係が餘程親密で、父たり母たる人人は、折折學校へ往つて親しく子女の教育の實況を見るのであります、たま卒業式などの際には、學校は父兄を呼んで、その教育状態を巨細となく見せしむるが例であります。また我國では私立學校に、あまり整頓せるものなき爲でもありませうが、世間では一般に子女を官立學校に入學せしむることを望むやうでありますが、英國などは之と趣きを異にして居ります。彼國の相當な家では、官立學校よりは却つて私立學校に子女を入學せしむる傾向があります。その理由は官立學校

十六

では、視學官などが嚴く干渉するを以て、學科など勢ひ機械的に教授せらるゝのみならず、生徒の數も多く且つ往往規則に拘泥するため、教師の理想通りに子女を教育することが出来ぬといふ缺點があるためであります。これに引換へ、私立學校では、五十人以上は入學を許さぬといふやうに、生徒の數にも制限を加へ、且つ校長たる人は相當な人格を備へ、理想を有し他の干渉を受くることなくして自己の意見を實行し得る次第でありますから、父母たる人は特に此種の學校を擇んで子女を託する風があります。曾て同國の一婦人が、友人にその子女を或學校に入學せしめんことを勧めた書柬中に左の如き一節が見えました。

目下私は二人の兄弟を某學校に託して教育して居りますが、その校長は洵に高尚な品性を備ふる紳士で、該校のモ－ラリチーの如きは極めて好況であります。兄は學業の進歩頗る佳良で、弟の方は少しく之に劣りますけれども、兩人共

に入學以來日尙ほ淺きに拘らず、肉體上並に精神上の發育頗る良好で、品性も漸次向上しつゝ、あることを認めます。クリスマスの休暇の時、教員を招待したるに、相互の間、些かも隔意なく、恰も兄弟知己と相語るが如き感を起しました。されば尊姉の子女も、願くは此學校に入學せしめられんことを望みます云々。

この書柬は全く母親の手に成つたものでありまして、眞に深き注意と愛情とが籠つて居るやうに思はれます。

○家庭と社會との關係

我國では、多く夫ばかり社會のことに關係して、妻の方は餘程疎隔して居るやうに見えますが、英國では、妻も夫と共に家庭以外の事にも盡して、敢て譲らぬ位であります。これ彼國では、家庭で執るべき婦人の業務の種類が、我國の程に多からぬ結果でありませう。彼と我とは元來國情を異にするこゝとなれば、一概には論じ難いのですけれども、

彼國では男女結婚するときは、新夫婦は舅姑と分れて、別に一家を設くるが常で、且つ女子でも皆相當な學識を備へ、頭腦も明敏で、成るべく時間を經濟的に使用するやうに力むるゆゑ、従つて外出する餘暇も多く得らるゝ譯であります。また舞踏會などにも、多くは夫婦相携へて行き、國會の開會式には、いつも兩陛下俱に臨場せらるゝが例であります。今回米國の陸軍卿タフト氏が比律賓視察の公務を帯びて來るに際しても、夫婦同伴なるが如き、此等は歐米諸國では普通のこと、少しも珍しくはありません。さてかく夫婦打揃うて外出する事は、子供の家庭教育上、一家の經濟上大に弊害のある事で、婦人の社會的事業に關係することは一朝一夕に其可否を決することは出来ませんが、兎に角婦人も男子を今迄よりも一層多く扶ければならぬと存じます。例へば男子の交際上必要な宴會の如き、成るべく家庭で十分に愉快に妻が援けて開かせるやうに致したいものです。

主婦が家庭で共に助けて宴會を開きますと、今までの如く茶屋などで催す必要がなく、従って社會の改良をも足進することが出来やうと思はれます。従來のやうに、女子が男子の足もつれとなる如き事は勉めて改めたいものであります。

我國では女子を養育するに三従の教訓を守らしめて居る結果でありませうが、日本の婦人は頗る忍耐に富み、艱苦にも堪へ、他に嫁して舅姑に事ふる場合に至れば、わが身の快樂を殺いでも、他を奉養せんことを勉め、克己と服従の精神が比較的發達して居りまして、従つて舅姑にも愛せられ、また舅姑あるがため、新夫婦の愛情が一層親密に保持せらるゝ傾向もあるやうです。また一家の主婦としては子女の鞠育愛養に勵み、他日母となりたる曉には子女の孝養を受くるが如き、大體より觀察しますれば、日本女子は柔順の徳によりて、却つて勝利を得て居るやうに思はれます、右は我國婦人の一特質と稱しても宜しかるべく、

いかに社交が發達しても、此等の美德は傷くることなしに保存して置きたいものであります。

英國などでは、女子なりとて、言ひたゞ事は遠慮なくいひ、爲すべき事は何事でも自由に行ふことを妨げぬのであります。上述の克己忍耐の力に至りては、抑も我國の女性に及びませぬ。私の知る英國婦人が屢私に向ひ「日本では新夫婦と老夫婦とが同居して居りても、別に不平も衝突も起らずして家庭が平和に治まつて行くといふのは實に不思議と考へられます、私等ならば直ちに親と衝突して、抑も和樂なる家庭を維持することが出来ませぬ。」と云つて、感服して居りました。此時私は答へて、随分ある人は衝突もしますが、世間では之を當然として許しません。あれは嫁か姑かどちらかが悪いと非難します故、常に修養して争はぬやう務める結果でありますと申しました。前陳の如く、英國では子女が結婚すれば両親より別れて一家を構ふるので、決して徒に親の脛をか

ちるやうな事はいたしません。何處に住せうと、如何なる生活を營せうと全く意のまゝで、これが即ち彼等をして大に自恃心を發揮せしめ、海外に於ける殖民事業の依りて以て隆盛を極むるに至つた一大原因と思はれます。尤も一利の存する所は又一害の伴ふを免かれざる道理で、一方に於ては多くの未婚者と、惑むべき多くの老人とを生じ、これがため莫大なる資金を投じて養老院を設立するが如きは事情已むを得ないのであります。倫敦では諸處に宏大なる養老院が設けられていづれも三千人四千人といふ多數の老衰者を收容保護して居ります。

○家庭の娛樂につきて

英國の家庭でいつも最も楽しく感ぜらるゝ時は夕餉の前夜であります。まづ大なる食卓を楚楚たる白布をもて覆ひ、その上には四季折折の美はしき花を綺麗に飾りつけ、定刻に至れば家人が卓の周圍を取捲き、その日くの面白き談話を交換しつ

ゝ、和氣霽霽の裡に一時間もかゝりて飲食するのでありまして、我國の如く黙然として食事をするやうなことはありませぬ。かくて食事が済むと、下婢が其處を片付け、家族は別室に移りてピアノやヴァイオリンを弾いて遊び、それが終はるゝ父親がデッケンスとかセイクスピアとかいふ人の小説などを面白く讀みます。すると子供等は或は父の脇元からまったり、或は暖爐の側に座を占めてこれを聴き、母親も編物を手にしながら之を聴いて居るといふやうな風習であります。彼地の文學には宗教的趣味が大に加味せられて居るゆゑ高雅純潔なものが多數ありまして、さながら聖書でも讀んで居りはせぬかと思はるゝ位であります。

○婦人と交際との關係

これは世間で往々耳にする話であります。我國では妻が若しお客を招待することを嫌ひますならば、夫は經濟上甚だ不得策とは知りながらも特

にこれを料理店に案内するといふ風であります。

然るに英國では、婦人も男子に劣らず、なかく交際好きでありますから、常に客を招待することを厭はざるのみならず、時としては夫の手先となりて夫を補助することがあります。例へば夫が大學より「日本の教育」といふ講演を託せられ、それ

につき必要なる材料を蒐集しなければならぬ場合ありとせんに、男子が直接日本婦人に對つて質問するのには面白からぬゆゑ、かゝる時分には、細君

が斡旋して、日本婦人をその家に招待し、談笑の間、巧みに種種の質問を試みて、夫が求むる所の資料を得るが如き事でありませう。また英國では、招待客の來りたるときは、家族總出で歓迎へを

するのてありますから、其客をば直ちに客室に通さずして、別に一室を供し、

此處で、五分間なり十分間なり結装を爲さしめ、その後で客室へ通すのが例となつて居ります。我國では途中で着衣が雨風に濡れやうが、または塵

埃で而が黴臭うが、少しも構はずして、その儘客を應接室へ通しますが、これはあまり面白からぬ風習ではありますまいか。

△之は困つものならずや

余の西洋の某國に在るや途上にて、小學校を參觀せし際に見知りたる十歳の女兒に會せり、余彼女を伴ふて家に歸り、問ふて曰く『嬢は菓子が好きか』『ノー』『然らば水菓子か』『ノー』『それならば何だ』『私に學校にて貯金をして居ますから錢が好きだ』蓋し彼女の家は貧に似、乃ちニツケル貸(五仙)を出して與へたるに、彼女の喜び、望外に出でたるが如く、『明日は一時に五枚ふえる』蓋し一仙の切手五枚をいふ是より余は彼女に川達を爲さじめ、其度毎に、一仙二仙乃至五仙づつを遣はせしが、彼女は復命する毎に、必ず『家に歸る』といふ、錢の催促を爲すなり、錢を遣れば、直に『左様なら』といふて去る、遣らざれば、何時に爲つても歸らず、其現金なると、其懸引に長ずると、其小さき頭より、あらん限りの智慧を絞りて、一文も多く取らんとすると、死ても日本の子供には出來ぬ仕業なり、之も亦困つたものならずや、米國の一教師、記者に語て曰く、猶人の子供は、最も算用に長すと、彼女は猶人の娘に非ず、而も猶斯の如し(某氏談)

野猪と組討ち狙討ち

川口孫治郎

町から僅に三里許、三里といへば世界を跨ぎにかくる勢からは何んでもない距離ではあるが、併しその三里は鳥も通ふにも苦む峻い山坂である、之を登つて下れば即ち我輩の第一の故郷である、まづの山中である、日夕見聞するも唯山と林と時を鈴のやうに響く小鳥の聲ばかりである。大昔からの木の國のその又大奥である。獨乙の文明は深林の中から出たといふが、それが真なら吾輩の如きも木の國の大深林中の産、少くとも日本の文明にはなど、といひたくなるとか、ならぬとか、そんなことはどうでも構はぬ。我輩は大に威張つても矢張り純然たるキナカツポーである。

田舎ッポーの経験は何時も粗末で、都人士の前では實以て参酌すべきところ多からうとの忠告もあつたが、それを参酌するまでにハイカル元氣が

未だ足りない、有りのまゝに述べませう、述ぶるといつたいは、野猪と組討及び狙討の實驗談です。忘れもせじ、師走十八日の朝まだき、林も森も霜でボロ／＼に白くなつて居る。谷川の水の音がサラ／＼と林を縫うてゆれてくる。落葉を踏んで帯のやうに細長い山田の端に降りて行く脚下がブリ／＼音がする。ヒドイ霜柱であつた。そこに路の片方からバサ／＼と音がして野薔薇や空木や狗黄楊などがもつれて叢生して居る間を押分けて、ヌツと出て來たのが、誠に不恰好な五十八瓏砲彈のや／＼なもので、而して其突端が此方を向いてグツグツと呻めきながらやつて來る。……諸君……敵意なき又敵すべき戦闘力の全くなき一匹の野兎にですら眞正面に我方向に突進して來られては、慣れない人々は覺えず道を避くるが自然の人情である。況して此時の相手は犬よりも圓太い。味方四邊に自身一人、一入敵が大きく映じた有体にいへは何だか心地が異様であつた。その奴平氣で吾

輩の方向に接近してゐる、其容子を落付いて視るところにオカシゲな顔付だが何處にか確にアドケないところがある、全く野猪の尋常一年生である。野猪の噂は度々聞いてはゐるが、實際に動いて來るのに面會したが此時が始めてであつた。小供だといふ當がつくと、此方は當年とつて十有六歳の蠻力發露の腕白盛り彼の正面からカブリ付いた、一呼吸に押潰さうといふのが此方の抱負。頭から押付けられた彼は嫌つてギアアと太い胴体に似合はぬ細い聲を出す、それが押へて居る我輩の腹の中まで響いた、異様な感じに力ゆるみしものか彼は被つたまゝで前進し始めた。之ではたまらぬと逸早く彼の兩前足を力任せに彼の胸に抱き付けた、之でやつと膝射の姿勢にまで捻付けた。一息つかんとする刹那彼は再び立射の構へに起きなほつて又前進を始めた。我輩も斯くなつては騎虎ならぬ騎猪の勢、仁田四郎ならば刃物を持つて居つたが吾輩は赤手でゐる。此處空前の奮闘といふところ。

我は押潰さう、彼は擔いで行かう、双方之より外に何の手も出ない、人間の子供と猪の子供との組討鷹つた揉んだの果は、吾輩終生の憾み、負けたではないが、敵は一步一步に吾輩を擔いてニヂリ進む、到頭、その山田の縁の數百尋の斷崖のところにやつて來た。斯ういふ時になると分別なかりし吾輩より猪の方が一層分別のないことに秀で、居る。平氣で我輩をかついたまゝで其斷崖を飛下らむ勢。吾輩も飽くまで負けぬ氣で戦つてゐたが少し氣がせて來た、實は吾輩にして最初若し彼の尻尾の方から押潰しにかゝつて居つたならば、此な場合になつても大体の梶をとつて自身丈の身の振が勝手に出來たらうが、怒しいに猪の首の動かぬことと従つて容易に噛み付けないことを知つて居つたものだから、頭の方からかぶりついて潰さうとしたのが抑の失敗、殘念ながら今や彼に倒に擔がれて我兩脚は地を少し離れて彼の頭の兩側から引摺つて居るのだから、此場合何とも致方

がない。

さうからする中、早や絶壁の角から我一脚がブラ下つた、正面しての「巖頭の感」は後年所華嚴の瀧に於て見たが、之に先つ十幾年足からつき出される巖頭の感は吾輩の實驗に於てあまり心地よきものに非ざること丈は明言出来る。イヤ冗談どころでない。實に冷りッとした。のるかそるかの一轉瞬、渾身の力をこめて機械体操の木馬飛び越し流に、猪の背中に兩手を突いて、ウント彼の尻尾の方即ち安全界に飛び越すや否や、瞬もくれむ向き直つて彼の尻尾を驚擾みにして第二の一呼吸に我ながら氣合の單つた全力に、エイとばかりに、其の猪を崖下目蒐けて思ひさま突き落してやつ。

吾輩は敢て好んでこんな手暴いことをしたのでない、實に止むを得なかつたのである。崖下は多分岩角ばかりで、猪の子、鼻の先でもイヤといふほど打つて仆れて居るだらう。わゝ可愛さうなことをした、といふ感も起つた。それに續いて既に

仆れたとすれば何と歎いても追付かない、イヤほんにそれを持つて歸れば自分の力自慢の實證にもなるわけだと忽ち起る凡夫の淺ましき誠に申すもはづかしい次第であるが、當時の實際の感想は左様であつた。

さらばと絶壁の左の方、杉林の中程まで下つて手頃の幹を握つて半身を差出し、下界の様子如何に瞰した。ヒドイことになつて居る。下は幸か不幸か岩ではなくて同じ山田の沼であつた。染物屋の藍壺が尻餅をついたやうな穴が開いて居つた、而かも其開けた主人公が居ない。察するところ猪君眞頂から沼田の泥中へはまつたと見ゆる。そしてドウしたもののか之を外づれて終つたらしい。あきれ返つて不圖見ると早や十七八間も向ふの復た他の絶壁の縁を平氣で歩いて居るのは例の奴さんであつた。

斯うなつてみると、凡夫は更に淺ましいものである。矢張ブツ殺してやつた方がよかつたのに、

などと愚痴が内心に沸いたが、命を知るものは巖
 壁の下に立たずだ、過つては改むるに憚ることな
 かれ、千金の子は猪の子に死せずだ、など瘡我慢
 に果敢ない氣休めをして、家に歸つたが、内心中
 は齒痒ゆくて／＼ならない、猪の尋常一年生なん
 かに負けたなどと自分獨りて内心中で線言をして居
 つた。

衣物に泥が着いて居る、膝頭に擦過傷がある、胸
 や腕には粗い猪毛でコスツた真紅な條がついて居
 る。到頭發見せられて問ひ詰られて詮方なしに有
 りし次第を語つて、空前絶後の御目玉を八方から
 頂戴した。

一体。野猪といふ奴は誠に蠻力の強い獸で、隨
 分太い樹の幹でもガリ／＼噛り傷す、さうかと思
 へば秋末に山田の稻穂を吸ひに来て一莖／＼に吸
 ひ廻つて一夜の中に恐ろしい面積を荒して終ふ。
 之に野猿も手傳いに來て百姓共の半歳の辛苦を一
 夕にして盡すといふワルサをする。それで百姓共

は彼等の厭がる芒の多い種を育てる事になつて居
 るが、併し腹がすいては野猪の眼中には芒も何に
 もあつたものでない。芒なりに皆やつて終う。近
 頃は彼等の驅逐の一法として石油の罐を竿の端に
 吊つて之を山田の岸に立て風のまに／＼終夜ガラ
 ン／＼やらせて居る。これも慣れては恐なくなる。
 唯彼等は火の光を恐るゝことが甚しいので、今
 も耗穀を焼いて最も有効に防がれて居る。稻の收
 獲が終れば彼等は早や焚火の恐しさもなくなつて
 得意になつて出で來つてあの大きな形態をして小
 さな蚯蚓を食ふ爲に、あの不恰好な鼻先で稻の菊
 跡を犁で鋤いたやうに割りかへし縦横無盡に掘り
 かへし夜の明け方に素早く隠れてしまふ。

それで百姓は唯一枚の折角の稻田を滅茶々に
 された意趣として何時も鐵砲を取出すのである。
 勿論、討ち取つても皮は粗末なもの、そのまゝ山
 野跋涉の沓にする。野猪の大さを呼ぶに何足と數
 を上げていふのは全く其全皮より製し得べき沓の

足敷から来たのである、大六足といふのが最も大なるもので、近頃の長靴位なるを六足即ち十二個分位とれる奴である、製革しても上等品にはならぬ、鹿の鹿のそれには及ばぬやつとのことで獵師の穿いて居るアノ義經袴、も少しわかり易くいへば新式の何とかいふ体操服の袴のやうなもの、材料にする位である。肉は上等とはいへぬが皮に於て鹿に劣る丈に此方では鹿より遙によい。兩國橋を渡で一才右へとつて折るゝと、一軒の肉屋があるそこに「山鯨」とかいて此野猪が吊されて居る。山鯨といふ名の付け方が面白、い、「し」といへば人がイヤがる、「猪食つた報ひ」など、脂肪の多い丈に兎もすれば後に報があるなど、賤しいたへと引かるゝ風習があるから、名を諱んだところが趣がある。併し山奥では東京よりは今一步進んで鹿の肉を紅葉といひ猪の肉を牡丹と呼んで居る。實際は山家では食へぬ、却て町や市の好事家に賞味せらるゝが多い。肉と皮とを外にしては他にあま

りこれといふほどの有用のものがない、之を討取るには随分骨である、併し専門家には相應に道がある。

野猪は生來犬が大嫌である、それで獵師は必ず二三匹の犬をつれて行つて獵り立てるのである、犬どもは其鼻で野猪の往來する道筋をつきとめて之を傳うて行くと、大抵は絶壁の上の絶壁の下、わかり易くいへば絶壁の中段で、人跡のつかないところに大將猪君が横はつて居る、彼の臥床に名を負ふ「臥猪の床」といつて、彼はズー体の大きな割に、蚊を恐るゝことが非常なもので、寒中の外は草を被つて行儀よく休むのである。朝はのゝからイヤに犬等が間近く攻寄せて吠えたりウルサイ、安眠を妨害するなど怒鳴りつくと犬の方から妨害を安眠するなど吠へかへす。ナニツト身を起せば犬どもは颯とひらく、そこで再び横になれば犬ども益侵入してくる、山の彼方此方より折々「行ケツ」といふ尖つた聲が反響する、所

謂猪の耳に獵夫聲「あまうい、心持もしなくなる
 そこで到頭猪君突出すことになる。既に起つた以上、前刻から自分の臥床を遠巻にグル／＼駈け廻つて居る犬を目がけて之を逃げ出しの駄賃とやらに投げ飛ばして獵師共には後を見せず奔竄して終ら、其際開き損じた犬は彼の鼻にかゝつて投飛されて果つることは往々あるが、併し太抵は犬もさるもの電光石火猪の突貫をかはすことが頗る巧妙である。既に遣けたら早速猪の跡をつけて勇往邁進するから、犬に蹤かれては猪も實は聊か迷惑である、獵師は折々報告する犬の吠へによつて犬を激勵しながら猪の進む方向に心して居る、自分の方向に獲物が来ると承知した他の獵師は沈着に耳をすまして居る、其時「左の追へ廻つたぞ」といふ遠方から鋭い警報が聞ゆる、頓て再び「右の尾に向いたぞ」と聞ゆる扱ては己の定地位に向いたかと、斯く不工合になると冷然として銃を腰にする、近頃の銃獵家のホヤ／＼などは左の眼

を閉ぢ損じて右の眼を蔽して照準とやらをとつて射撃することもあるさうだが、吾輩どもの射撃は「腰ダメ」といつて銃身の元半分迄を腰に添へて、縦横自在敵の來る方向のまに／＼應戦する流である、獵師は斯うして待つて、矢頭をはかつて一發でやつけてしまふ。

萬一射損するか或は其一發に致命しなかつたかの際には、凄くなる。彈丸が彼の躰内に留つて頓がて發熱する。擦過傷でも氣分がよくないものを況して旨管銃創になると狂ひがくる、所謂手負猪になる、やぶれかぶれの鼻當り次第、人をも物をも皆敵と見做し荒れに荒れて鼻息荒く牙を鳴して突進してくる、深窓に育つた方々には眞正面に見ることの出来ぬ凄まじさである、が靜かに心を空うして熟視すれば一種の壯嚴の感じにうたる、獵師の之に對するは如何にも危いことは危いが、危いの之に興味の深いところもある、敵が勢猛くなる丈それ丈此方は反比例に冷靜になつて之に對するの

である、岩も砕けと突貫して来た其間一髪、ヒラリと躰をかはして、第二回の突貫の盛返しを待つのである、第一回の突撃に射撃しないのには理由がある。あまりにヒドイ突貫だから、七八間前で射留て夫で氣息が絶えても尚ほ素敵な情力で數十貫の躰が彈丸の如き速度で射手のところまで眞直に飛んで来る、之が爲に生きた猪を討殺して其死んだ猪に押潰されて落命した獵師が少くなかつた苦い經驗があるのが理由の一つ。今一つは颯とかはした刹那に靜に手負の場所なり程度なり觀察する、敵は名に負う猪武者が外づされて七八間も行き過ぎて、やつと廻らぬ首を廻らして再度の突貫に立直つたまで此方は己の足場と敵の射頭とを定めて、イザや來れと待ち構へる、猪にとりては最後の一發を頂戴すべき此方の準備の爲が理由の第二である、斯く落付かれては百發百中、殆んど銃の先を嚙らるゝまで冷眼に所謂腰狙に構へるのである。誠にキワドイやり方であるが、第二回

の早速の突撃は情力がついて居ないし、殊に突き上りでゐるから第一回の突下のやうな勢がなくて安々銃先にかゝつてしまふ。

其銃器といつても決して連發でも又必しも元込單發でもない。未込のスナイドルも及ばぬ、唯の火繩銃で十分である、一發やれば殆んど最期なる丈に彼等の發射の慎重なもの推はからるゝ。而も突撃一度を外して其次回を受ける迄に完全に莖填を了する敏捷と沈着とには吾輩も頭が上らない。

尤も萬一獵師がやられた場合には誠に仕末にない代物である。往年金谷といふ里へ其叻外に長く反り出して恐ろしく後方に曲つた白き牙を鳴らし蝟の如き黒褐の粗毛を全身に逆立て地響さして躍り出た、アレヨ〜と人々の逃げ迷ふのみで手出するものは一人もなかつた、折柄巡回中の巡查部長は職掌柄抜劍して喰止めやうとしたが忽ちやられて終つた、部長がやられたと聞いて土地の俠客が「己れ」と出懸たが之亦思ひ切つて投げ

られた狂猪は遂に勢に乗して谷川の渡頭まで狂奔して来て、其處で踏み外づしたので彼の連の盡きドバンと落ち込んで白泡を立つと同様にブー／＼怒號しながら泳ぎ出した山の王は川に入つては一卒にも及ばぬ、此瞬間に夫れ一人を手に手に得物を携えて、浮きつ沈みつ半ば流れ行く彼を包圍攻撃して、やつと退治してしまつたことがあつた。

何事も知らぬが佛、人生文字を知るは苦しみの基など思ふこともいはるゝが、時には知らない爲に却てさまざまの経験もするものかな。ニーチェの所謂「成功に達するまでは數多のはづかしさを忍ばねばならぬ」といふこともつく／＼思ひ合さるゝ。併し野猪なども組討を致すものにあまり賢いものがない、吾輩も一度やつて以後は絶然やらないと決心した。



色の話

藤五代策

二十八

凡の物体は形と色との二つから成り立つて居る其の形は本體で色は艶である形はよく整ふても色の之に調和せぬときは美觀を呈せぬのである今左に色に就きてお話し申ませう

色は之を細分すれば學者の話に二三万種からあるさうですニールトンは太陽の光線は七色であることを證明せられて世界の凡ての色は皆此の七色から様々に調合して出来たのであると説かれた其の七色とは赤。黄。青。橙。紫。緑。紺のことである彼の虹は正しく此の七色を見はしてをる吾々が晴天に外に出て淡黒き壁に添ふて霧水を吹くときは明に太陽の光線の七色を認めることが出来る其他三稜鏡と云ふ器械にて太陽の光線を分折すれば尙一層明かに七色を認め得られるのである今此の七色を一定の順序と分量に由て平面圓板に塗色し之

を劇しく回轉するときは全く白色に見える何と面
白い現象ではありませぬか

其後ブリユスター氏出て、太陽の光線の七色は尙
之れを纏めて赤。黄。青の三つの色に歸すること
を證明され實驗されて世界の凡ての色は皆此の三
つの色を種々様々に調合したものであることを述
べられて今日では之れが定説となつてまだ之れを
動かす程の實驗が出ないを以て赤。黄。青の三色
を母色とか三原色とか又は第一色とか稱へられて
をる

此の第一色即ち三原色中の各二色つゝは相調和し
て第二次色を作るのである赤・黄は調和して橙
となり赤と青とは調和して紫色となり黄と青とは
調和して綠色となるのである

次に此の第二次色即ち橙・紫・緑の三複色中の二
色のつゝは亦相調合して三次色となるのです即ち
紫と橙とは和して紫棕色となり橙と緑とは和
して香櫞色となり紫と緑と和して橄欖色となる

のです是より亦第四次色五次色と複雑なる色を作
るのである左に之れを表にて示しませう

赤黄青 = 三原色 又は第一色 或は單色とも云ふ

(赤 + 黄) = 橙

(赤 + 青) = 紫 = 第二次色 又は複色とも云ふ

(黄 + 青) = 綠

(橙 + 紫) = 紫棕色

(橙 + 綠) = 香櫞色

(紫 + 綠) = 橄欖色

二色以上が排列するときは大に引立つ色の配合と
極めて靜かに落付たる配合とが見られます凡て

三原色 即ち赤黄青は互に相引立つものである例
へば赤の側に青か又は黄が排列するときは何とな

く卑しく引き立て見へます又三原中色の何れかの
二色が調和して成れる色は他の一色に對してよく

引立て見へるのである赤と青との調合せる紫は黄
に對して引立つて見える是等を反對の配合と云ふの

です萬綠綾を織りなす中に一枝の姫百合花の笑み

を含めるが忽ち目に見ゆるは全く反對の配合からくるのである私は是に付きて一ツの狂歌を作つたからご紹介しませす「姫百合の一本ゆゑに夏の野の草はみながら馬鹿げにぞ見ゆ」地圖等の區劃を判明にするには此の反對の配合を用ひねばならぬのです然るに前と相對に青又は黄は緑と對して靜かに落付て見えますが之れは全く緑が青と黄とより生れたからである換言すれば緑と青と黄とに深き縁故を有して居るからである斯の如き配合を同類の配合又は同一の配合と云ふのです我々が大なる呉服店に行きて千種萬態の反物を見るに其の多くは地合の落付きて如何にも高雅に上品に見る者が澤山あるが夫等は皆同類の色の配合によるのである凡て野蠻人は色の觀念がないから凡ての裝飾衣服の飾りまで色の配合が下品に見えて一種厭忌の念を生じますが文藝の進んだ國民は色に對する觀念が如何にも高尚温雅に向いて來る

されば婦人の衣服の模様を圖案するには先づ此の

色の配合に付きて深く研究することか肝要である衣服の事に付き今一つ重要な件がありませすから序に申し上げませす凡て色のはでやかに縞地の荒らいの若き男女に適し縞地の細いのは老人に適することとは誰もご承知でせう縞の横縞は身丈を低く見せ縦縞は丈け高く見ませすから母姉たるの人は常に此の考を持つて長け低き子女には縦縞を着せ女子ならば髪を高く結ふてやるのです又余り高過ぎて見苦しい子供には横縞を着するのです

白と黒とはよく調和しますが之れは一種特別である例へば黒地の洋服にホワイトシャツや襟輪胸飾が白雪を欺く様に見えるけれども少しも下品に卑しく見えない却て品よく見えるは不思議である

其他白は何れの色にもよく配合しますが之れは前に述べた如くに白は諸色の程よく調合したものであるから何れの色にも縁故を有して斯く調和して見えるのでせう又黒は何れの色をも黒ずみて見ませす紫の側に排べは紫を黒ずませ緑の側にあれば

黒緑くろきよするのです

金色きんいろと銀色ぎんいろとは何れの色いろともよく調和てうわしますが之れも白しろと同じ理わけで金きんと云いひ銀ぎんと云いひ何れも諸色しよいろに縁故えんこを有ゆうするに由よしるのである

色いろには亦刺撃またしげきの度どの強弱きやうじやくがあります三原色せんげんいろは何れも刺撃しげきの度どが強いが取分け赤あかは最も強いのです例へば多くの兒女こどもの一群いっぐんを遙はるかかに遠方えんぽうより瞥見べつけんするに先づ目めにつくものは赤あかのリボンりぼんと赤帶あかおびである

千軍萬馬せんぐんばんばの整列せいれつせる觀兵式くわんべいしきに近衛兵こゑへいの赤帽あかぼうと騎兵きへいの赤スボンあかすぼんとは一際目立ひとまめだつて強く見ゆるは全く赤色あかいろが諸色しよいろに勝まされて刺撃しげきの度どの強いに由よしるのです

赤色あかいろは亦非常またひじょうに殺菌性さつじんせいに富とんでゐるから稚兒ちごの襖うす衣いや男女だんなの禪ぜんに結むすべば微菌けいじんを殺ころして仕舞しまふ働はたらきがある

赤色あかいろに次ついでで刺撃しげきの強つよさは黄青わうせい橙綠ていりやくと順じゆんに行いきますが紫むらさきと黒くろとは刺撃しげきが最弱もつよいのである

色いろは亦視力しりよくに大なる關係かんけいを有ゆうするものである太陽たいようの光線こうせんに向むかて久ひさしく見濟みますときは視力しりよくに異情いじやうを

來きたし或あるは黒くろずみて見え或あるは青あおずみて見える又白またしろ色いろに向むかて眼めを使つかふときは次第しだいに視力しりよくを損そんするのである是等これらは全く白色しろが太陽たいようの光線こうせんを強く反射はんしやくするからであるそれで學校がくこうの教室けうしつの壁色かべいろは白しろにしてはならぬ黒色くろいろか灰色はいいろがよいのです夏期なつに白衣はくえを着ちやくするは全く太陽たいようの光線こうせんを反射はんしやくせしめて熱ねつの直射しやくしやくを滅めつする理わけである之これに反はんして黒色くろいろは太陽たいようの光線こうせんをよく吸收あしりゆうしますから冬期ふゆには黒色くろいろの衣服いふくが適宜てきぎである此こゝの外ほか色いろには亦熱色ねついろと寒色かんいろとがありますが赤あか橙だいりやく黄わうは熱色ねついろで綠ろく、青せい、紫むらさきは寒色かんいろである熱色ねついろは陽性やうせいで大おほに浮うき立つ氣味きみがある寒色かんいろは陰性いんせいで何なんとなく氣分きぶんの沈しづむ性せいがある元來げんらい我邦人わがくにじんは沈しづむ勝かちちにて寒色かんいろ的てきである之これに反はんして西洋人せいやうじんは浮うき立ち勝かちちで熱色ねついろ性せいである男女だんな共に若わかきときは熱色ねついろを好このむは自然しぜんであるから衣服調度いふていとどに至いたるまで凡すべての裝飾さうじやくが熱色ねついろを用もちひて居ゐる妙齡めうれいの婦女子ふによしの赤黄等あかきなどのはでやかなる色いろを好このむはよき適例ていれいである之これに反はんして老人らうじんは極めて沈しづむ勝かちちなる寒色かんいろを好このむのである

劇場又は音樂堂の好き陽氣たつ處の室内を裝飾するには熱色を用ひて人心を浮き立たせねばならぬが修身講堂や祭祀場の如き崇嚴なる場處は寒色を用ひて思はず心を改め容儀を正す様に裝飾を仕向けねばならぬ熱色は亦情誼濃かなる意に用ふることもある一家團樂火を擁して笑語するは不言の間に火なる熱色が一家の情誼を繋いで居る様に見えるるに寒色は亦大に薄情冷靜の意を見はして居る人の面貌の蒼白なるは多く薄情冷靜にして奸惡は者が多い今年三月フレベル會にて發行せる紀念繪端書に青色を用ひて卒業生を遠く離れ去りて次第に學校との情誼の薄くなる意を諷してあつた之れは確かに寒色が情の冷かなるを示した一例であるまいか

熱色と寒色との裝飾の仕様によりて或は熱く感ぜしめ或は涼しく感ぜしめるのである夏季の室内の裝飾を野山の焼ける繪や婦人の紅裙模様のみ畫き散らしたのは如何に 客人をして一層熱く感ぜ

せますから之れは大に寒色を用ひて青松に雪の降り積まれる繪など最好ろしいのです冬季は之れに反して熱色にて畫ける掛物や壁繪こそ客をして温かに感ぜさすのである

◎處世落第者の資格

- 彼は時計許り眺めて、時の經つことのみ待構へて居る。
- 彼は始終不平のみ並べて居る。
- 彼は何時でもグツグツして居る。
- 彼は自信がない。
- 彼は無暗に質問する。
- 彼は常套の申譯は「ア、忘れました」である。
- 彼は直ぐ次の仕事の準備をせぬ。
- 彼は己が仕事に注意が足りない。
- 彼は失錯つたからとて、後の警戒をするといふことがない。
- 彼は自分より劣て居る者の中に、友達を求めぬ。
- 彼は自分の判斷で動くことをせぬ。
- 彼は研究に身を入れぬ。
- 彼はその才能を發揮しようとはせずして、何事も遣り放しである。
- 彼は毎夕何か娛樂がなくてはならぬとして居る。
- 彼は平素の自墮落のために理想を失つて居る。
- 彼は金のは入る方を勘定して出す方を制限せぬ。

割 烹

石井泰次郎

三色玉子

鶏卵を湯鍋に入れ（湯は攝氏五十度位、まだ指の
入れらるゝほどなり）二十分間、煮たて、鍋をお
ろして、水に一つ一つつし入れて、からをむき
去るべし、○湯煮の時、湯の煮えすぎぬやうにし
て煮るがよし）湯は攝氏百度に煮いかへりより、
前の九十五度位がよし、これは上面の波の大きく
立つ時が百度にして、其波の少したつほどが九十
五度なり、火かげんにて何度にもなるなり）さて
よく煮へたるかを知るには、玉子一つすくひ上
げて、鍋より他に出せば、直に水氣のかはくをよ
しとす、おそく乾くうちはまだよく煮えぬものと
知るべし、又水を取りうつつは黄味の色のよくな
る爲といへり、
からをむきたる玉子を、庖丁刀にて切目をくるり

と入れて、二つにそつと割かけて、黄味を取出し、
白味は、中を布巾にてぬぐひて、黄味のつかぬや
うにして、次に左の手ついでにぬぐひよるべし、
○白味の方、細かに庖丁刀にてきざみて（此白味、
十四につき、砂糖三益十六分の割合に入るゝなり砂
糖は玉子十匁位一つに白の方一匁三分、黄の方一
匁五分、或は黄へ二匁 白へ一匁の割合にて合す
るもよし）砂糖を割合によりて合せ、次に鹽を（白
味十四につき三匁）入れ、木杓子にてまぜ合せて、
馬尾篩のうらにのせて、木杓子にて押してこすべ
し、
○黄味の方、木杓子にてすこしくづして、砂糖（黄
味十四につき、三匁）を加へ、よくまぜて、右の
白味をこしたるあとの、馬尾篩にてこしてよし。
○右うらごしの仕方は、目の細かき馬尾篩に、玉
子をのせて、木杓子にて、向の方より、左へ一度
右へ一度、めぐらすやうに、平たくひいたり、た
て、こきたりして、（篩の目のまゝに木杓子にてこ

く時は、目よりて用へなくなるなり、それゆゑに目をすぢかへて用ふなり。○又初より目をすぢかへて篩をわいて、向の方に玉子をよせてのせて木杓子にてうすもよし、

○右の白の方のこしたるを、三つに分けて、其一つを別の鉢に入れて、其鉢の分へ、晒あん粉（北海道製の上品のもの）六匁を加へ、よくませ合せておき、

○次に底のなき木のわくの五六寸角の、深さ一寸五分位のものに、上下に（中へ入るほどの蓋をつくりおきて（是は押船のわくてよし）

○此わくの下の底になる方へ、美濃紙をわて、わくをかけて、其紙の上へと自味をつめて、上の方へのせる板にておしつけ、次に板をとり出して、

○其白味の上へと、晒あんませたる分を入れて、箸にてならして、又板にておしつけ、次に板をとりて、

○其上へと黄味の分を入れて、板にておしつけ、其まゝ暫く、かるさおもしをのせおき、のちにおもしと除きて、上の板の方へと、うらがへして、のせて、湯鍋に、蒸籠をかけて、其蒸籠の中へ入れて、（湯のよく養立ちたる時に入るなり）蒸時間は十五分内して、取出して、さまして、切方すべし、

右の中の色は、小豆を煮たる、養汁を、中の小豆をのぞきて、汁のみを、よく煮つめて、それにて色をつけてつくるが定なれど、手がるくする時には、右のさちしわんにて色つけてつくるがよし、

ときわみそ

白味噌百匁を、搦盆に入れて摺り、馬尾蹄の裏にのせ、木杓子でこして、赤みを百匁をも、すりてこして共に合せて、鍋に入れて、古酒四合餘を加へて、よくとかして、炭火にかけて砂糖三盆八十匁を加へ、ませ合せて、

○黒胡麻を五勺、焙燥にていりて、すりばちにて

すりて粉となし、

○くるみの剥たるを、熱湯に入れて、細き竹申の
先にて皮をむきさりて、三十ばかり

黒ごまと、くるみを入れて、美生をすりおろした
るを少し加へて、よく煉りて、つかふべし、



▲世界第二の大時計 米國ワイラデルファイアの公會
堂に此程据附けたる大時計は時辰表の面直径二十五
呎にして分針は一分毎に一呎の距離を進む此時計は
地上三百六十呎の所に在りて其價は六万圓實に世界
第二の大時計なり第一の大時計は白耳義メシユリン
市の聖ロムホルド寺院に在るものにして其大さは此
時計の凡そ二倍なりと云ふ



無聊吟集短歌

鹽野

奇零

初秋の夕風冷し沖の船
ミルク呑む子に泣かれけり秋の暮
買ひ足した酒にまぎれて秋の暮
日に幾度變るながめや秋の山
芒野や破れし笠の捨てゝあり
椽側に草紙干す子や小春の日
猫の子の寝たり起きたり小春椽
糸つけて蜻蛉放ちぬ秋日和
噓して寝る氣になりぬ秋の月
我一人手紙書く夜や虫の聲
蝗取る女の群や赤襷
早稻刈りて今朝の祝ひや小豆飯
小春日や襷がけして障子張
演習の騎馬三百や秋の野に
樺太に菊の薫りや天長節

短歌

菅原櫻心

美くしき物みなうつるよき目して此世送らむ

歌のみ友よ

萩桔梗尾花すゝきに秋たけて廣野に寒うこほ

ろぎの啼く

園生よき千草褥に秋虫は秋を讃じて歌つゝる

らし

秋風に高梁ゆるし南椽の夢を破りて雁鳴さわ

たる

ぬば玉の暗の船路は燈臺に我世の道は愛の

光りに

森 白 雪

ひやゝかう秋の夕日の片てりにこぼれ初め

たり白萩の花

天高う澄み液りたる夕晴れを雁ひとつ行く

秋のいろ哉

秋花の眞白き莖に座を占めて秋の空見る我

こゝろ哉

愛 子

つかねたる野菊なかばを分ちては黙しゝま

ゝに別れつる日や

月の夜を歌女こほろぎ絃しめて秋の哀れを

かなでぬる哉

死の眞洞めぐりてこゝに來しものか身に泌
み渡る初秋の風

竹 島 芙蓉

秋なれや花野の暮れを物思ひ行く少女子に

ちぎれ雲とぶ

夕月に片頬をむけて物おもふ少女の鬢を吹

く秋の風

秀 子

さすらひの我身に似たり秋くるゝ夕べの雲

のちぎれゝゝに

夕鐘や又思ひ出のつらかりき萩もこほるゝ

秋の夕窓

三 井 白 梅

おはれなる巳が宿世 月見れば月も涙にし

めりても見ゆ

思ひ兒は遠き河原に石つむか夕日淋しき初

秋の窓

桔梗さく野中に等きし胡蝶塚又も亡き兒を

まぼろしに見て

起 雲

思ふこと果さて歸るものゝふの鐘のほさきにすこし夕月
宵寒やをぐらさ燈火かきたてゝ遠つみ程の軍記ひもどく
小さなる月の室戸に思ひ秘めその冷かき胸守りぬれ

* * * * *



三つの答

硯山人

むかしドイツにフリードリッヒと云ふ大層偉い王様が
 ありました、このフリードリッヒ大王は自分の
 近衛兵中に新しく編入される者がありますと
 きつと次の三つの問をお出しになります

「御前は幾歳になるか？」

「御前は幾年兵隊をしているか？」

「御前は自分の給料と食事とをいつもとどこをり
 なく受取つてゐるか？」

そしていつもきつとこう云ふ順にきくのです、或
 日一人の若きフランス人がフリードリッヒの近衛
 兵の大將のところへやつてきまして自分をどうか
 近衛兵の一人にじてくれるとたのみました。此の

フランス人はドイツ語が少しも話せませんので近衛兵の大將は採用する事は出来ないかと断りましたけれどもフランス人はしきりと頼みますので近衛兵の大將もしまひには氣の毒に思ひましたものですから「それでは近衛兵にしてやろう然し王様は新らしい兵隊を見るときつと御前は幾歳になるか御前は幾年兵隊をしてゐるか御前は自分の給料と食事とをいつもといこをりなく受取つてゐるか」と云ふ順に御聞になるから御前は前以てその御答を順に獨乙語で暗記してゐたらよいだろうと云つて次ぎのやうに教へてくれました先づ王様が始めて御問があつたら「二十一年です」と答へればよいその次の御問には「半歳」と答へ最後の御問に對して「どちらにも」と御返事申上げなさいと丁寧に教へてくれました、さて或る朝の事でしたフリードリッヒ大王は馬に乗つて近衛兵のゐる所にゆかれまずと一人見なれぬ兵隊がゐました、そこで王様は早速いつもの三つの質問を御かけになりました

三十八
 が此の時にはどう云ふものでしたか第二の間から御始めになりました此の見なれぬ兵隊とは勿論フランス人のことでした

「御前は歳年兵隊をしてゐるか？」

フランス人は教はつた順に

「二十一年です」

と御答へしましたそこで王様は喫驚なされて

「それでは御前の年は何歳か？」

と御聞になりました、フランス人は早速に。

「半歳」

と御答へをしたので王様はいよゝゝ喫驚なされて

「ナニ半歳！、之れは不思議だ、朕が氣がちがた

のかそれとも御前が氣が違つたのか？」

と獨言を云はれましたそれをこのフランス人は第

三の間だと思ひましたので

「どちらにも」

と御答へしました、その所へ丁度折よく近衛兵の大將が參りこの有様を見て王様に實は斯々の次第

と前の事情を委しく陳べましたので王様は此の兵隊がドイツ語を全く知らない僕人だと御さゝになり大層笑つてそのまゝ御歸りになりましたとさ

堇御殿

とよ子

或る所にお花と云ふ九つになる女の子がりました。此子の家は母さん一人きりで極く貧乏な暮らしをして居りましたから、お花さんは學校から歸ると直に水を吸んだり雑巾がけをしたりして母さんの御手傳をして居りました。處が或時お花さんが何時もの通り學校から歸つて見ると大事な母さんはお加減が悪いとて寝てお出です。お花さんは驚いて一生懸命にお背中を撫でたりお足をさすつたりして居ました。其中に大分母さんの御機嫌も直つた様ですからお花は此暇に母さんのお好きな堇を採つて來て挿して上げ様と思つて裏の牧場から

山の方へと出掛けて行きました。

頃は丁度春の半でたんぼ、やれんげなどが澤山今を盛りと咲いて居ります。お花は此きれいな花の中をあちこちと歩いて「堇やすみれ、母さんの大好きなすみれの花よ」と歌いながら堇の花の數々を採り集めて小さな花束を作りました。

頓がて氣がついてあたりを見ると何時の間にか来たのか道の知れない山奥の谷の中で何方が先來た方やらさつぱり道が知れなくなつてしまひました。

お花は一人悲しくなつて「ママ氣のつかないことをした、何うしたらよからう」と思つて居ると後ろの方から

「お花さん〜、」

と云ふ聲が聞えました。お花は

「ハイ、何誰？」

と振り歸へつて見ると、是れ又不思議、頓と見たことのない、然もきれいな姉さんが立つてお居ります。其顔の美しく優しいこと、そして頭には堇

の花の簪が一杯に挿してあつて右の手には堇の花籃を提げて居ました。そして優しい聲で

「お花さん、あなた、堇の花束造しらへて何なさるの？」と尋ねますから、お花は

「寢て居る母さんの御慰みに持つて行つて上げるのです」

と答へると姉さんは

「それではお花さん、そんなのよりもつとよい花を上げませう、私の家へ入らしやう、」

と云つて先きに立つて歩いて行きますからお花さんも後から附いて段々と山の奥のとある谷間迄來ますと大きな門のある立派な御殿に來ました。

處が其門は鍵が掛つて居て開きません、何うするかと見て居ると、其姉さんは手に提げて居た花籃

の中から堇の花一つ採つて之と鍵の上に載せると不思議にギーツに云ふ音がしたかと思ふと大きな

戸が左右に開きました。

門の中へ入つて見ますと廣い〜お庭には堇が一

杯咲いて居てよい香がブン〜と風に送られて來ます、頓がて御殿の中に入つて見ると何處も彼處も皆堇の花で埋められた様になつて居ます。床の間の掛物から襖の書迄も堇の花で飾つてありました。そして室の真中には大い卓子があつて其上には花籃が十も二十も置いてあつて何れにも皆堇の花があふれるばかりに盛つてありましたのでお花は我知らず聲を出して

「ア、善い堇だ」

と云ひますときれいな姉さんはニコ〜と振り返りながら、お花さん此花籃は大きいので小さいのでも何れでもあなたの好きなのを上げませうと云つて呉れました。お花は大悦びでよい加減の一つ貰つて家へ歸りました。スルト姉さんは門の處迄送つて來てそしてお花に

「さよならお花さん、また明朝行らつしやい。

そして此門が閉まつて居たら先きの様にして開けて入つしやい一

と云つて呉れました。お花も丁寧に御義理して家に歸りましたが、家では大層お花の歸りが遅いので母さん心配して居る所でした。

「母さん唯今、いゝ花でせう」

「オーお花かえ、大層遅かつたね、私何うかしたのかと思つて居たよ、オーきれいな花だね、何處にあつたえ」

そこでお花は山できれいな姉さんに遇つて堇の御殿へ行つたことを話して籃から一つかみの堇を採つて母さんの手に渡さうとする花の下から異様な光がバツと光りました。お花は

「アラ、母さん何でせう是は？」

と云ふので能く〜籃の中を改めて見ると花の下は一杯の寶石でダイヤモンドだのルビーだのと云ふ大變貴い飾り玉が澤山に續々と出て來ました。母さんは大層驚いて是はさつと山の姉さんが間違いて呉れたのだらうから返さなくてはいけないと云ふので明日の朝お花は學校へ行く前に籃を持つ

て山へ行き前の日に教へられた道を通つて堇の御殿へ行き昨日の様に堇の花を門の鍵に掛けると門が獨り手にギーンと開き中には昨日の姉さんが立つて居ました。花子は直に入つて行つて

「姉さまおはよう御座います。昨日は誠に有り難う御座いました。お蔭様で母さん、大層悦びましたの？けれど私、姉さんにお詫に來ました。私昨日歸へつて籃わけて見たらば中から斯なものが出たの、是れ姉さん間違へて下さつたのでせう。私ちつとも知らなかつたの。」

「アラマア夫れで態々來たんですか。夫れなら貴女に上げたのだから貴女のものですよ。是からも一返しに來ないでよー御座いますよ。今日は歸りにも一つ上げませう。」

と云つて又一つ籃を呉れまゝたので、お花は喜んで家に歸りました。是からお花の家は貧乏でなく暮す様になりましたので近所の人は皆不思議に思つて居りました。めでたし〜〜〜

會 報

小春日和の十月十二日午後二時より第四十六回本
 會例会を麻布幼稚園に於て開く中村本會主幹の
 開會の辭のち東京高等師範學校附屬小學校加藤訓
 導の「小學校より見たる幼稚園」なる演題のもと
 に有益なる話をき、一同耳をひき立てぬ。やがて
 茶菓にうつり記念撮影後散會したるは午後五時な
 り。

なほ當幼稚園は本年四月より麻布區教育會の事
 業として設立せられたるものにて閑静なる紀州
 侯邸内にあり有志關係者保姆熱心に斯道の爲め
 盡粹せられつゝあり、



金額	自何年何月	至何年何月	姓 名
五〇	四〇、八	四〇、一二	島村 やそ
一、二〇	四〇、九	四一、七	孟 歌 子
二、〇〇	四〇、七	四二、二	赤星 千代
六〇	四〇、七	四〇、一二	吉田 すす
六〇	四〇、九	四一、二	鳴谷華常小學校
一、〇〇	四〇、一	四〇、一〇	和田 耕 月
一、〇〇	四〇、一	四〇、一〇	奥田 織 衛
一、五〇	四〇、九	四一、一一	吳 和 歌
一、五〇	四〇、八	四一、一〇	加藤 貞 子
六〇	四〇、七	四〇、一二	小澤 久 良
七〇	四〇、八	四一、二	福田 ゆき
二〇	四〇、七	四〇、八	伊藤 冬
二〇	四〇、八	四〇、九	土保 かん
六〇	四〇、七	四〇、一二	鈴木 まさ
三〇	四〇、五	四〇、七	平塚 みほ
五〇	四〇、八	四〇、一二	波邊 榮
九〇	四〇、四	四〇、一二	小野 房
五〇	四〇、八	四〇、一二	石野 つや
六六	四〇、九	四一、二	竹島 久萬恵
三三	四〇、一	四〇、三	勝村 こま

一 二〇	四〇	六〇	八〇	一 二〇	一 三〇	三〇	三〇	一 二〇	九〇	一 二〇	二 〇〇	一 五〇	一 〇〇	一 二〇	六〇	六〇	五〇	六〇	一 二〇	一 〇〇	五〇	五〇	七〇	
四〇、一	四〇、一	四〇、一	四〇、一	四〇、一	四〇、九	四〇、九	三九、五	四〇、四	四〇、一	三九、四	四〇、一〇	四〇、三	四〇、五	四〇、一〇	四〇、四	四〇、八	四〇、二	四〇、一	四〇、七	三九、一〇	四〇、七	四〇、八	四〇、六	
四〇、二二	四〇、四	四〇、九	四〇、八	四〇、二二	四〇、二二	四〇、一一	四一、一一	四〇、四	四〇、二二	四〇、二二	四一、二二	四〇、二二	四一、四	四一、五	四〇、九	四〇、二二	四〇、七	四〇、二二	四〇、二二	四〇、七	四〇、一一	四〇、一一	四〇、二二	
澤村 枝	太田 捨子	司馬 ぶ	福岡 子	川上 光	小松 ぼ	澤本 みる	橋本 代	勝日 加	横澤 いて	高橋 ち	千崎 如	曹典 初	奥村 代	館つ ね	平野 ぼ	長崎 稚園	飯沼 しづ	阿部 イノ	脇野 つい	小原 藤枝	丸山 まさ	山内 次郎	小山 くわ	福田 ふく

八〇	一 〇〇	八〇	一 〇〇	一 二〇	五〇	八〇	一 〇〇	一 〇〇	八〇	六〇	一 〇〇	一 〇〇	五〇	五〇	一 〇〇	五〇	一 五〇	一 五〇	二 〇〇	一 〇〇	一 二〇	一 〇〇	七〇	二〇	五〇
四〇、八	四〇、一一	四〇、八	四〇、六	四〇、一	四〇、一〇	四〇、八	四〇、一〇	四〇、一〇	四〇、八	四〇、一〇	四〇、一〇	四〇、二	四〇、一〇	四〇、六	四〇、六	四〇、二	四〇、二	四〇、二	四〇、一	四〇、一〇	四〇、一〇	四〇、一〇	四〇、六	四〇、六	四〇、二
四一、三	四一、八	四一、三	四一、三	四〇、一二	四一、二	四一、三	四一、七	四一、七	四一、三	四一、三	四一、七	四〇、一一	四一、二	四〇、一〇	四一、三	四〇、一〇	四一、四	四一、九	四一、九	四一、一〇	四一、七	四〇、三	四〇、七	四〇、六	
杉本 そと子	北野 晴	佐々木 まさみ	江藤 いつき	山崎 いよ	江原 たつ	浅岡 はま	中島 まさ	小森 てる	星野 ひさ	饗庭 なほ	上田 敬太郎	武石 八重	藤澤 さつき	坂元 つや	伊藤 政良	坂元 とめ	松田 とし	桂 乙和	内藤 いね	今村 琴猪	伊藤 高子	海賢 ちばを	青山 たか	山口 伊三郎	

婦人 こと 第七 卷 第十一 號

一 二 一 一 一
七 六 七 五 二 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 〇 〇 七 〇 〇 八 六 二
〇 〇

四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 四 三 四 四 四 四 四 四
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 九 〇 〇 〇 〇 〇 〇
四 七 四 六 一 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 六 五 七 一 一 七 八 一 七

四
〇 一 一 〇 〇 〇 〇 〇
一 一 一 一 一 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 八 二 四 七 〇 一 三 四 六
〇 二 〇 〇 二

柳 武 大 大 長 佐 岡 佐 伊 山 金 喜 下 富 下 鳥 波 町 市 吉 林 堀 森 村 寺 服 津 石 佐 後 松
下 藤 塚 西 寛 外 み 弘 三 子 口 西 三 多 見 三 四 龜 次 居 鋳 谷 則 す 次 越 川 田 本 部 野 田 藤 藤 田
て う さ 益 子 漧 つ 鎮 一 郎 さ き 吉 門 郎 郎 ち 文 り み 蝶 郎 次 源 つ き と 繁 良 ゆ さ い し
い め だ 益 子 漧 つ 鎮 一 郎 さ き 吉 門 郎 郎 ち 文 り み 蝶 郎 次 源 つ き と 繁 良 ゆ さ い し

一
〇 〇

四
〇
一 三 二 二 二 四 四 四 五 一 五 四 四 六 八 一 一 五 七 一 二 三 二 四 五 四 一 四 一 二 四 一 一 四

四
〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 一 〇 一 〇 二 〇 二 〇 二 〇 一 一
一 三 二 一 二 二 二 四 一 九 三 一 三 一 一 一 一 一 一 四 一 一 一 一 六 一 三 一 一 三 一 一 二 一 一

長 鈴 田 關 赤 用 山 高 野 吉 高 工 八 今 澁 鈴 今 岡 吉 吉 今 窪 萩 小 長 小 芳 伊 宮 南 淺 持 川 三
岡 木 中 間 瀬 田 木 副 田 原 藤 坂 谷 木 井 部 田 野 堀 田 野 原 尾 松 賀 藤 川 井 田 村 須
ぎ し 加 ま 豊 た 直 ふ さ き あ ま 千 あ ら ふ 一 八 し み 瀧 ち き 美 ひ 彦 時 と
榮 ん 利 ん わ 代 竹 す 子 み 吉 じ だ よ き さ 代 や ル み 枝 重 か の 乃 か め 代 さ 朝 泰 信 子 し

會 告

明治三十九年四月より同年十二月迄の會費御滞納

の方は書肆弘道館へ御送附下さる様豫而申上置候
處未だに御滞納の方有之是非なく今般本會より立
替支拂置候に付爾今本會へ直接納附下され度、尙

帳簿整理上差問不尠候に付此際至急御納附相成度

御願申上候也

明治四十年九月

フ レー ベ ル 會

フ レー ベ ル 會 規 則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保
育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾貳ヲ齎出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノ
ハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、
保育參列品幼兒成績物展覽會 會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲ
ナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ
保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織
ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
一 雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一 會長 一 人 會務ヲ總理ス
一 幹事 十 人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
一 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期サニケ年トス
但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コ
トアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變
更スルコトヲ得ス

フレイベル會發行

幼稚園遊戯

定價金四拾錢 郵稅四錢
會員特價參拾錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてあります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附録として採録致しました。

フレイベル會發行

幼児談話材料

定價金四十錢 郵稅四錢
會員特價參拾錢

世に行はれて居る多くのお伽話ば幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるゝ方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

明治四十年十一月一日印刷

發行所

編輯者 辻本卯藏

印刷者

日下主計

發行所 女子高等師範學校内

フレイベル會